
となりのおばさん

マイマイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

となりのあばさん

【年代】

201907

【作者名】

マイマイ

【あらすじ】

念願のマイホームを手に入れたけれど、隣に住むおばさんがちょっと変なひとで、私の家を覗いている？

ちょっと怖いお話です。短いので気楽に読んでいただけたらうれしいです。

となりのおばさんほ、ちゅうとおかしい。

わたしが玄関先の花にお水をあげていたら、水の音がつるることつてジョウロを吊り落とされた。

旦那の博之と手をつないで玄関を出たら、下品だ、はしたない、と怒鳴られた。

うちの庭の木の葉が、おばさんの庭に何枚も落ちてきたと言つて、一畠中おばさんの庭を掃除せられたこともある。

もつ、うそやう。

せっかく念願のマイホームを手に入れたのに、なんだかケチをつけられたみたい。

博之に相談したけど、気にするなよ、なんて笑われるだけ。

休みの日だって家にいないんだから、まるで他人事みたい。

ああ、毎日毎日、いつまでもこんなことが続くんだろう？

といひが、ある日を境に、おばさんまといても静かになった。

以前は部屋の中で音楽を聴いていただけでも、つむることこつて怒鳴つこんできたのに、

なんにも言つて来なくなつた。

あんまり急におとなしくなつたから、逆に気持ちが悪い。

そういうえば毎朝していた玄関周りの掃き掃除も、最近はしないみたい。

博之にそのことを話すと、わたしの顔を不思議そうにみつめて、

少し黙つた後、静かになつたなんならこじやないか、と言つた。

まあ、そつなんだけビ。

でもね、おばさんは静かになつた代わりにね。

『気がつくとつむ、窓からじつじを覗いているの。

黄色く濁ったような、いやな目。

台所、寝室、浴室。あらゆる窓から、いつもあの目がわたしたちを見ている。

「うそ、気のせいなんかじゃないわ。

いつも同じ、首に赤いスカーフを巻いて、いつも見てくるの。

博之はおおぜい、お腹を抱えて笑いだした。

なんだい、それ。赤いスカーフって、そんなのこまじめ巻いてるひとこののかい？

とにかく、もう考えるのはやめたまうがいいよ。

あつと、疲れてくるんだよ。

今夜は早く寝よう。さつまといへ、博之はわたしの頭を優しく撫でた。

それでもわたしが、ビルの裏で話すのをうなづいた。

あれは絶対、おばやんの事だ。

「改ページ」

あんまり気持の悪いから、博之に「警察に相談したい」と聞いたり、

なんだかひどく叱られた。

「とにかくまだいい加減に、元の仕事に戻ることだ、つて。

でも、どうしても不安で仕方がないから、わたしは博之が会社に行つた後、

親友のマキちゃんに電話した。

マキちゃんは美容院で働いていて、今日はお休みの日です。

マキちゃんに事情を話すと、心配だからすぐこへわ、とついて、

本当に電話を切つて1時間くらいで来てくれた。

「だいじょうぶ?なんだか声が普通じゃないみたいだつたから」

マキちゃんは同じ年とは思えないほどスタイルが良くて、オシャレだな。

綺麗にメイクされた顔を見て、わたしは全然関係ないことを考えていた。

「うん・・・博之は、そんなはずないっていつもだけじ

「でも覗かれているような気がするのね?」

それって、気持ち悪いよね。マキちゃんが形の良い眉をひそめる。

マキちゃんはいつも、わたしの味方になってくれる心強い親友だ。

博之と結婚するまえにも、たくさん相談に乗ってくれた。

わたしは、今朝、警察に相談したいと黙つて博之に叱られたことも、今まで本当に不安で怖かった気持ちも、全部マキちゃんに聞いて

もひつた。

「マキちゃんは、うるさい、と優しく声でわたしを慰めてくれる。

安心したのか、わたしの皿からポロロと涙がこぼれた。

マキちゃんは皿でわたしの頬を優しく包んで、

そして、囁いた。

「ほんとうに、おもえてないのね」

マキちゃんの声が、まるで地の底から響いてくるみたいに低くて暗い声だったから、

わたしがびっくりしてマキちゃんの手を払いのけた。

「・・・マキちゃん。」

マキちゃんは、突然笑いだした。その美しい大きな声で、高らかに。
わざわざ笑った後、マキちゃんは冷やかにわたしを見る。

そして、マキちゃんはわたしを台所に引っこ張つてこつた。見たことのない、怖い顔で。

そして、わたしを突き飛ばして、台所の床を指わした。

「おまえさんは、ここにいるんじゃない」

なに? なんの? と、頭がまつしりになる。

「鍋屋の音がひるむことか向とかで、おばさんができるた
とや」「」

あんたが首を絞めて殺しちゃつたじゃない。
その手だ。あんたが殺したのよ。

頭のなかがぐるぐると回つ始める。

そんなこと、そんなこと。

あの口。やつだ、おばさん何か何かを持つて、怒

鳴つゝんでもたんだ。

それで、いつもここへ来てわたしのことを何度も呴こして・・・

それで、もつこや、いや、って思って、この手でおまんの細い首を・・・

わたしは自分の手を見つめる。

マキちゃんは鬼のような顔で、皿。

「私が手伝つてあげたのよ・・・おまんをいの皿所の床下に貼付けるのをね」

^改ページ^

だって、博ぐが頼むんだもの。

あんなことが起つたとわかれば、会社だつてくびになる。

せつかべのマイホームも手放す羽目になるかもしけないって。

だから、私が、手伝つてあげたのに。そんなことも忘れるなんて。

「・・・でも、ねばねばせたしかに窓からのがっていたわ・・・」

わたしの言葉に、マキちゃんはおかしくて仕方がないとこりふりにケラケラと笑う。

「ねえ、窓からのがっていたのは、私よ

だって、博之ったらあんたとまもつ終わりだつて言つてたのに、ちつとも別れてくれないんだもん。

私と一緒にいない間に、いちやこちやされたら腹が立つじゃない。

だからね。あんたたちのじと、ずつと窓から見てたのよ？

それもあんたにだけわかるよつてね。

マキちゃんの言葉に、わたしは血の氣が引く、全身ががたがたと震

えはじめた。

博之がそんな「じと・・・?・マキちゃんはびひじてこな・・・

ガチャガチャと音がして、玄関からひとが入ってきた氣配がある。

博之? こんなに早い時間こ?

キッチンに入ってきたのは、たしかに博之だった。

わたしじもづ、混乱して動けない。

マキちゃんが博之を見て笑つ。

「私が呼んだのよ? そろそろカタをつけてほしこつて

博之は肩をすくめて、じょうがないな、と囁く。

・・・じょうがない?

博之はわたしの耳元で、いつものよつと優しく頭を撫でながら囁く。

「おまえはなぜかがつねに邪魔だから殺しちゃつたんだよな
？」

わたしあつなかく。田の前が涙でかすむ。

「今度はおまえがじやまなんだよ。『めんな

博之がわたしの身体に馬乗りになる。

そしてわたしの首を思い切り締め上げる。

抵抗しようとするが、マキちゃんが全力で押さえつけられる。

ああ、もうわたし、死ぬのね・・・

ぼさやつとした意識の中で、あいへじつもこじりが頭をよぎる。

寝室の窓は2階にあるのと、マキちゃんが窓を覗いたんだろ

う・・・

薄れゆく意識の中で、最期にわたしが見たのは、

血所の窓からひびきを覗く、おばやんの黄色く濁った目だった。

(おわづ)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0190z/>

となりのおばさん

2011年11月30日22時48分発行